

隨筆百人百景

季節の本棚

秋冬



随筆百人百景

李節の本

糊

章

下

秋冬



工業

蔵

牧羊社 編

季節の本棚

—随筆百人百景 下

昭和五十九年十一月一日 発行

編者 牧 羊 社

発行人 川島壽美子

発行所 牧 羊 社

東京都渋谷区渋谷二丁目十二の十二

電話 〇三(四〇〇)一六一四

振替 東京 九一九〇二〇二

印刷 三和印刷株式会社

製本 松栄堂製本所

定価 一、四〇〇円

目次

秋

私の一番長い日

白い道

枝豆哀歌

ああ大文字

海浜の新涼

曼珠沙華

萩と猫

生島 治郎…… 13

扇谷 正造…… 16

川井 正…… 20

富永 一朗…… 25

吉田 精一…… 29

橋本 鶏二…… 33

廣津 桃子…… 38

風にそよぐコスモス

加太こうじ……43

秋燈断想

伊藤 桂一……47

灯を掬う

高橋 玄洋……51

漂うもの

別役 実……55

ひつじ田

外山滋比古……59

九月の風鈴

立原えりか……63

名月

関根 弘……68

夜の秋

郷 静子……71

新酒の味は青春の味

山村 美紗……74

メートルの家

高野 澄……78

箕面にて

桂 信子……82

紅葉の想い出

室生 朝子……87

秋にはサティの音が

鍵谷 幸信……91

ハルピンの秋

北條 秀司……95

櫨紅葉

小島 直記……99

黒猫の家

葛原 妙子……103

野わけの記

五所平之助……107

鋪道

中西 進……111

冬

檨

落葉の歌

樹木周辺

寒竹風松―雜草園冬景色―

秩父の冬の祭り

せとものや

むかしの火事

真鍋美恵子…… 117

宮本 幹也…… 124

吉野 弘…… 129

山口 青邨…… 133

井出 孫六…… 138

武川 忠一…… 143

武智 鉄二…… 146

寒夜の火	樋口 茂子……	150
ナマコの季節	山下 明生……	154
わが愛するクリスマスの唄	平野 敬一……	158
自転車の話	扇谷 義男……	163
おおつごもりまで	生野 幸吉……	167
幕がおりない晩	本橋 成一……	171
追憶のこと	近藤 芳美……	175
去年今年	田中 仙翁……	179
メキシコで迎えた正月	寺田 竹雄……	185
年賀状	ドナルド・キーン……	189

むらさきの木の実

元日二句

新春旅情

天高く鶴の飛ぶ

雪ある風景

吹雪の碑

春近し

有情と無情

中村 汀女…… 192

飯田 龍太…… 196

松本 亨…… 201

田井 洋子…… 205

田崎暘之助…… 209

更科 源藏…… 213

阿木 翁助…… 218

長谷川 泉…… 222

装幀・カット 伊藤鑑治

凡例

一、本書に収録した随筆は昭和四十九年一月号から昭和五十八年十二月号までの「俳句とエッセイ」から選んだ。

一、筆者名横の肩書は最近のもの、故人の肩書は生前のものである。

一、文末の年月はその随筆が掲載された「俳句とエッセイ」の号数をさす。また年月の後の小題はその随筆が発表されたときの編集部よりの課題である。

季節の本棚

——随筆百人百景

下

秋



私の一番長い日

生島治郎

(作家)

今でも、自分の身体を仔細に調べてみると、種痘の名残みたいな痕がいくつもあわわわと残っている。特に、手脚がひどい。これは十三歳のとき、日本へ引き揚げてきてから、いろんなムシに食われた痕跡なのである。

私が引き揚げてきたのは、一九四五年の二月で、まさに敗戦直前のことであつた。それまで上海にいた私は、戦争によって、どれほど日本内地がひどいことになっているか、全く知らなかった。食べものが配給制になっていることは知っていても、それが餓死寸前のものしか配給されなくなっているとは知らなかったし、そのために人々の気持ち荒廃し切っていることも知らなかった。日本の山河は美しく、日本人の心もまた美しいと信じていたのだ。

ところが、日本へ引き揚げてきたとたんに、人々が食わんがためにエゴイステイック

になっていて、他人に対するいたわりを持つ余裕もなく、美しい山河などかえりみるひまさえないことを、いやというほど思い知らされた。われわれは母の郷里である金沢へ引き揚げたのだが、戦災を受けていないこの地は、特に他^{よそ}地者に対して冷淡であるように思われた。中学生になったばかりの、食い盛りであった私には、このはじめての飢えの経験は手ひどくこたえた。毎日、空きっ腹をかかえ学校へ行っても、教科書もなく、友達もできなかった。

私をかまってくれたのは、金沢のムシどもだけである。どうやら、新しい血に興味を覚えたらしく、ムシどもだけは、私を大いに歓迎してくれた。ノミ、シラミ、蚊、ブヨなどが、土地の人よりはよけいに私にたかってくる。特に、ブヨに刺されるのには参った。

初夏になると、このブヨがいたるところで私を待ちかまえては、むきだしの手脚を刺す。外地生れで、このムシに免疫性のない私は、刺された部分がたちまち腫れあがって、かゆくてたまらない。そこで、その部分をかきむしると、必ず膿んでデキモノになる。私の両手両脚には、この種のデキモノが無数にできて、惨憺たる有様になった。多分、水がかわったせいで、栄養失調気味だったせいで、化膿しやすくなっていたのであろう。